

〔研究ノート〕

初年次実践教育において涵養されること

—ソーシャルワーク実習入門における学生の学びを通じて—

川島 恵美^{*1}、梓川 一^{*2}、岩本 裕子^{*3}

1. 研究の背景と目的

関西学院大学における社会福祉専門教育は、70年近くの歴史の中で一貫して実習教育と呼ばれる現場における実践的な体験を重視して教育プログラムを実施してきた。社会福祉士、精神保健福祉士の国家資格が制定され、資格に対応した演習、実習科目を行う上でも、体験を通して効果的な学びが得られるように体験学習の循環過程（星野、2005）を意識したカリキュラムを設定している。

また、社会福祉学科ディプロマポリシーとして、「社会福祉学に関する専門的知識を身につけ、社会福祉課題の解決に関与し、貢献できる」ということが示されており、4年間の社会福祉学科での学びを活かし、専門職としてだけでなく、市民としての貢献が可能になる教育を目指している。市民的貢献ができる人材を育成するという点については、「社会福祉専門職養成教育においては、市民が解決しようとする問題に適切な助言援助や支援を行うことができるように、その前提として、当該市民の生活問題を共に生きる市民として理解できることが必要であり、そのため、『民主的で創造的な市民』性を養成する必要がある」（川廷、2007、p 142）という問題提起も出されている。

このような背景の中で、筆者らは、社会福祉学科の1回生を対象とした実践教育のクラスを担当し、学生たちが4年間の学びの中で基本的な社会福祉の知識を得て、市民として様々な課題にかか

わることができる態度を身につけるためのいわば素地作りとして教育を行ってきた。しかしながら、教員側の意図として設定されたこうした教育の目的が果たされているのかについては、十分な検証がなされてきたわけではない。そこで、学生たちの学びの内容を、学生による授業のふりかえりを分析することから見出していく研究を行うことになった。昨今、「学生が何を学んだか」を「学習成果（learning outcome）」として評価することが教育にとって不可欠な要素としてとらえられていることもあり（松下、2012）、全学的に実施されている学生による授業評価によって、数値的に示される結果だけではなく、学生が「何を学んだか」について記述した文章を質的に評価することの意義も大きいと考えられる。

尚、本稿のタイトルである初年次実践教育については、社会福祉教育において、将来実習やフィールドワーク等、現場に出て学ぶための準備学習として初年次に実施する教育プログラムであり、特にその教育方法として実践的、体験的な要素を多く含み、知的・概念的学習というよりも、体験を通じた学びを意図したものという定義で用いる。

今回の研究では、実践教育プログラムの第一段階と位置づけられる科目である「ソーシャルワーク実習入門」（以下 SW 実習入門）という半期の授業を通して、受講した学生たちが何を学んだのかということの質的に分析することを目的とする。すでに、この科目で実施される3本の柱のひとつである1泊2日の「千刈合宿」については、

キーワード：初年次実践教育、体験的学び、学び方の学び

*1 関西学院大学人間福祉学部准教授

*2 奈良佐保短期大学准教授

*3 関西学院大学非常勤講師

学生が設定した合宿でのねらいと、その達成度を比較するという形で具体的に得られた学びについての考察を行った(川島、梓川、岩本、2016)。そこでは、大きく、「他者とかかわりについて」、「自己覚知と他者理解」、「学びに対する姿勢」という3つのテーマが見いだされた。学生たちは、合宿において他者とかかわり、友人をつくり、人間関係の輪を拡げる中で、新たな自己を見直すきっかけを得たり、他者の思いを知ることで相手を尊重した行動の必要性などの気づきを得た。その上で、福祉に対する意識の変化、実践的なスキル習得への期待、大学教育や福祉教育への期待や意欲を得ていた。この分析結果を初年次教育という観点から考察し、初年次実践教育として実施する場合には他の科目との連動性を考慮した内容のカスタマイズやアクティブラーニングの枠組みからの再検討などの課題が見いだされた。本稿では、次の段階としてSW実習入門を履修した学生による授業全体を通してのふりかえり用紙に記入された内容を質的に分析し、学生の学びの要素を抽出して2年次以降の社会福祉教育にどのように活かすことができるのかを考察したい。

2. SW実習入門について

前述したようにSW実習入門という科目は、本学社会福祉学科における実践教育プログラムの第一段階と位置付けられる科目である。社会福祉士の指定科目ではないが、2年次以降の社会福祉士指定科目である演習科目および3年次の福祉社会フィールドワークという実践科目を履修するための先修条件となるため、実質的には社会福祉士を目指す学生と、フィールドワーク履修予定の学生が履修することになる。1年次の段階では、多くの学生がソーシャルワーク実習または福祉社会フィールドワークを履修することを視野に入れているため、1回生の8~9割程度の人数の学生が履修する科目である。

シラバスに示された授業目的は、「見学実習およびタウンウォッチングを通じて、実践教育を行う施設・事業者・機関・団体・地域社会等に関する現状把握を行い、基本的な知識を増進させ、現場に関するイメージを持つと同時に、合宿での体

験学習を通じて実践教育に必要な人間関係における基本的価値や態度について学ぶこと」となっている。そのため、①千刈キャンプ(関西学院大学の施設)における1泊2日の合宿、②将来の実習先、フィールドワーク先となる施設・機関等の見学実習、③自分が居住する地域のタウンウォッチングという大きく3種類の方法を通して実施される。秋学期開始後3週間目の週末に合宿を行い、11月の学園祭の休講期間中に見学実習が実施され、11月末までに各自でタウンウォッチングを行う。いずれも、事前にオリエンテーション、見学先の事前学習、記録の書き方指導などの事前の準備学習を行い、事後には、分かち合い、授業全体での報告会という形での事後学習を行う。これらは10人前後のグループに分かれて実施されるが、そのグループに2回生から4回生までのラーニングアシスタント(以下LA)がつき、修学補助として作業やグループ活動を支援したり、LA達自身の体験を情報提供という形で示すということも行っている。

3. 調査研究の方法について

本研究は、学生がSW実習入門の授業全体をふりかえるとともに、学生の学びと気持ちの共有化を通して、授業における学びの成果と今後のソーシャルワーク教育のあり方を見通していくことをテーマとしている。

ふりかえりの方法は、SW実習入門の最終日において以下の三つの段階を踏まえている。第一に、半期における授業の内容として3本の柱(千刈合宿、施設見学実習、タウンウォッチング)での学びを映像を活用して全体でふりかえり、確認をする。第二に、各学生がSW実習入門の授業の学びを個別にふりかえり、「あなたがSW実習入門の授業を通して学んだことを五つ挙げてください」と求められたふりかえりシートに、思いつく学びを記入する。第三に、それら記入された「学びのシート」の内容をもとにグループワークに取り組み、その後、グループごとに発表し、全体で共有する。

本調査データは、2015年度の秋学期にSW実習入門を履修した101名の学生が記入した上記の

シートをもとにカードを作成した。尚、この人数には3名の3回生と2名の2回生が含まれるが、カード化は無記名で行ったため、これらのカードも全体に含めて分析を行った。得られた有効カードデータ数は483枚であった。なお、質的調査の手法をとる本調査研究は、山浦（2016）により実践的に確立・開発された質的統合法（KJ法）を活用し、以下のような手順で進めた。

(1) カード分類の留意点

カードは一つのカードあたり一項目の内容として単位化を図った。ただし、1つの行に、複数の内容にまたがる記述がなされていた場合には、その内容を分けてカード化した。これらのカードを分類し、グループ分けをする際に、以下の点に留意した。①全てのカードを教室床や机の上に広げ、調査者の個別の意図は入らないように留意し、分類を進めた。②分類の際には、完成図を先読みするのではなく、個々のカードのつながりに着目することを意識した。③分類されたカード群に仮のグループ名をつけた。最終で9つのグループとなった。④どのグループにも属さない例外的なカードがあったが、その存在を尊重した。また内容が意味不明のカードが2枚あり、それらは意味不明グループとネーミングした。

(2) 第一の段階：カード分類とグループづくりについて検討を繰り返す

それぞれに分類されたカードは、仮のネーミングをつけた各封筒に入れて区分・管理をした。その後もネーミングの検討は重ねた。グループづくりの作業の途上で、各カードの内容を思い出し確認することにつながりや共通性を再考し、カードの所属グループを変更することもあった。メンバー間で合意があれば、このようにカードの所属を動かすことがあった。すべてのカードが分類された時点で第一段階を終了とした（終了までに約4時間×3日間を要した）。

(3) 第二の段階：大きな関係性と流れからシンボルモデル図の作成へ

カードの分類ができた後も、各グループおよび各カードの見直し検討を繰り返した（4日間4回）。日を変えて検討を加えた理由は、新鮮な感覚で新たな気づきや発想ができることにあった。カードとグループの分類が固まった時点で、各グループのネーミング（表札）を確定した。そこからは各グループのつながり・関係性を検討し、各グループ間における関係図を組み立てていく。最終段階として全体の流れを重要視しながら、シンプル化を図ることにより全体像をわかりやすく整

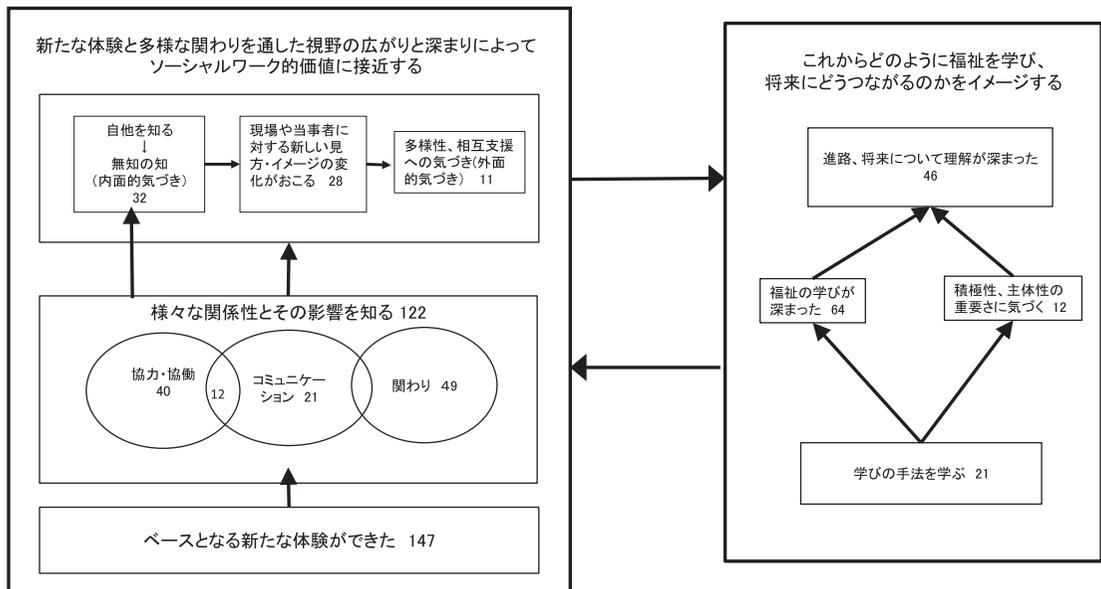


図1 「ソーシャルワーク実習入門における学び」シンボルモデル図

え、シンボルモデル図（図1）を完成させた。尚、シンボルモデル図の各項目に示された数字は、それぞれの項目に関連して記入されたカードの枚数を示したものである。質的な読み取りと同時に、カード枚数による内容の厚みを示すものとして参考にした。

4. 分析結果と考察

SW 実習入門の授業には、多数の体験学習型のプログラムが準備されている。学生はそれらに取り組み、体験を重ねていくうちに、多様な学びを体得している。

シンボルモデル図に示されたように、学生の学びは大きく2つに大別することができた。第一に、新たな体験と多様な関わりを通した視野の広がりや深まりによってソーシャルワーク的価値に接近するということである。シンボルモデル図の左側に位置している。第二に、これからどのように社会福祉を学び、将来にどうつながるのかをイメージするということである。これは、シンボルモデル図の右側に位置している。以下にその詳しい内容と考察を述べる。以下においてカギ括弧内は学生が記述したものである。

(1) 新たな体験と多様な関わりを通した視野の広がりや深まりによってソーシャルワーク的価値に接近する

〈ベースとなる新たな体験ができた〉

SW 実習入門は、体験的に学ぶことを基本的な授業テーマとしている。上述のように、大きく3本の柱をもって進めている。例えば、その一つであるタウンウォッチングやキャンパスウォッチングからは「いろいろな地域のことを知ることができた」「自分たちの街やキャンパスを知る・理解する・考える」という学びになっている。また福祉現場の訪問からは、利用者との出会い、専門職の実践の観察など、現場において見る・聴くという体験は大学ではできない貴重な学びとなり、そこからさらに「現場の雰囲気を感じた」となっている。千刈の合宿も含めて、3つの体験的学びに共通していることは「実際に行ってみることで学ぶ」「初めての新しい経験ができた」「ふだんは気

にしていないこと・ところに新たに気づく」ことである。

〈様々な関係性とその影響を知る〉

上記の様々な体験から、感じること、気づくことができている。さらに人間関係における学びにつながっている。以下の①から③の3つに分類することができた。

①関わり

ソーシャルワーク実習入門は、学生の仲間とともに体験や実践に取り組んでいくことをテーマとするため、「関わり」は学びを進める上でその必要条件ともいえる。授業のプログラムを学んでいくためには、なんらかの関わりがなくては実現しない。学生は、一回生の秋学期において「初めてのひととの関わり」をもつことができたり、仲間との「交流ができた」ことを実感している。普段の大学での生活において関わりを持つことが少ないかもしれない先輩（LA）がSW 実習入門の授業をアシスタントすることで「先輩との関わり」ができている。様々なワークに取り組んでいくとき、先輩からの助言や促しを受けていく。また仲間とともに取り組んでいく。こうして「関わり大切さ」を感じ、「関わりを通して得るもの」があることに気づいている。これらも体験・実践的授業を通しての学びである。こうした体験的な授業のなかで「友達ができた」「増えた」ことは大学生生活の豊かさにも通じている。

②協力・協働

体験的学びにおいては、仲間とともにあるテーマに取り組み、その達成を目指すことで「協力することで達成できた経験」「協力できた」「協力した」ことを実感している。さらにそこから自分一人ではないことを感じながら、グループをつくり、グループのメンバーになることで、活動を通して自然と「グループの中での役割を意識する」「リーダーシップ」「メンバーシップ」を感じることができていく。取り組みをする中で仲間やグループ、そのメンバーでの向き合いを意識することにより、「チームワークの大切さ」を感じとり、グループの目標を目指して取り組んで行くことができている。さらに自分と他者がともに取り組むことには「協働することの楽しさと難しさ」を含めて多様に感じる学びになっている。

③コミュニケーション

グループでの取り組みにおいては、互いがわかりあうためのツールが必要であり、「コミュニケーションの大切さ」を感じている。体験を通して、コミュニケーションの意味を現実的にも体験したのであろう。「伝えること」「自分の意見を出し、人の話を聴く」という根本的な意義を表現している。

④協力・協働とコミュニケーションの交差点

上記の2つにおいて注目すべき点は、協力・協働とコミュニケーションの重なるところである。これらは協力や協働をする際に、コミュニケーションをツールとしつつも、さらに必要と感ずるものがあったと思われる。「相互に尊重しあうこと」により、協働の関係性は形成され、グループにおける人間関係を維持していくためにも互いの「価値観の尊重」から「合意をつくる」ことへ進めていくことで、グループの目標達成ができるのである。そこには互いのいいところを認めあう「ストレングス視点」も必要になっていた。

〈視野の広がりや深まりによってソーシャルワーク的価値に接近する〉

三つ目の段階になると、多様な関係性の気づきから、再び自己を見つめようとしている。さらにソーシャルワークの価値づけにつながっていく。

① 自他を知ることから無知の知へ

「いろんな人と話す」ことで、人それぞれの「さまざまな考えを知る」ことができている。さらには「他の人の個性や性格を知る」「仲間の良いところをいっぱい知る」というように、仲間との関係性を築き、知るということができている。

様々な体験からの学びを通して「自分を見つめ直す」ように、改めて自分に向きあおうとしている。自分と他者とのさまざまな関係性からもふりかえるように、「自分に対する気づき」「他者に対する気づき」などの新しい発見がある。そこから、人と関わる上での「新しい見方」にも気づいていく。わからないこと、知らないことに対する自らの内面的な気づきとしての「無知の知」を感得している。

② 新しい見方・イメージの変化（内面的気づき）

施設や現場の見学に行くことで、現場や当事者に対する新しい見方・イメージの変化が起きてい

る。例えば、釜ヶ崎でのまち歩きでは、ホームレスの人々に対する偏見をもって自分気づいている。また、施設に見学に行くことで精神障害者は見た目では全然わからないという気づきもしている。これまで自身がもっていた先入観とは異なることがわかり、「イメージが変わった」「偏見が少しとれた」自分を感じ、受けとめる学生が多い。

これまでとは「違う視点」で物事を見ることができ、またこれまでに気づけなかったことを「新しく知ること」ができている。さらにここから人には「それぞれに様々な視点がある」ことにも気づき、自分と他者のそれぞれの存在も感じている。こうした感覚が、次の多様性への気づき、相互の関係性につながっていく。

③ 多様性、相互支援への気づき（外面的気づき）

合宿に行くことに不安や心配はあったが、様々なグループワークを通じて、少しずつ関係性をつくり、協力し協働できることにより「仲間と物事に取り組むことの楽しさ」を感じるようになる。そこには「お互いの支えあい」があり、「人を助ける。人に助けられる」関わりを感じていく。さらに「支援される側の気持ち」も学び、そこから「お互いの理解と尊重」につながっていく。

(2) これからどのように福祉を学び、将来へどのようにつながっていくかをイメージする

〈学びの手法を学ぶ〉

まずこの授業に参加することは、結果的に学びの手法について学ぶことにつながっているということである。つまり、今までの高校での講義型の受け身の学び方ではなく、この授業全体を通して一貫している「体験的学びの手法」を「実体験として学んだ」ということになる。具体的には、「自分で考えて調べる力がついた」「調べ方が上達した」「自分の考えを伝えるにはどのようにまとめることができるか」というように、「調べる・まとめる」ということに、そしてグループワークによって「発表の仕方が上達した」「自分の意見を主張する力がついた」というように、プレゼンテーションの力がついたことを実感している。さらに体験後には、「今の感覚や記憶は忘れてしまう」ことや、ふりかえることで学びが深まるとい

うことを体験したことで、「ふりかえることの大切さ」を学んでいた。このように一連の体験的学びのサイクルを手法とした授業をとおして「実際に体験し学ぶことの大切さ」を実感し、その手法を獲得していた。そしてこの授業全体をとおして「実践することが自分の成長につながっている」ことを実感するとともに、さらには学科内の他の授業カリキュラムともリンクしながら成長を実感している。

〈福祉の学びが深まった〉

この体験的な学びを通して学生達は、「高齢者」「障害者」のこと、あるいは「〇〇施設」というような具体的な知識をはじめ、実習のこと、さらには福祉全般についての「知識が増え」ていき、机上の専門的で各論的な「福祉の知識を学ぶ」のはもちろんのこと、学内でのフィールドワークや各自の地元でのフィールドワーク（タウンウォッチング）の体験が「自分の地域のことをよく知れた」「自分の地域と他の地域には違うところもあるが共通点があることがわかった」など、「地域に関する相違点や共通点への気づき」を促し、その学びを実態と結びつけて「住みよい地域についての理解」にまで発展させている。

また、実際に現場に見学実習に赴いた体験は「福祉の仕事」の「辛さ」「楽しさ」「やりがい」などを学ぶこととなる。また「福祉現場でなされている工夫や配慮を知る」など、福祉現場の実際や職員の思いを知ることで、先述のフィールドワークと相まって、「福祉やソーシャルワークについてもっと知りたい」「施設に興味を沸いた」など、より身近な存在として「福祉に興味」をもち、さらなる学びへの欲求につながるまでに至っている。

〈積極性・主体性の重要さに気づく〉

この学びの手法（体験的学び）の体験を通して、学生達は、「主体的に学ぼうとすると記憶に残りやすい」「探求心をもって」「自ら行動する」「積極性を培う」「主体的に参加する」ことなど積極性・主体性の重要さに気づかされることとなる。つまり、このことが、自分たちの学びの成果に大きく影響することに気づいている。これは、講義型の手法では得ることの難しい学びと言える。

〈進路・将来について理解が深まった〉

「福祉の学びが深まった」ことと、「積極性・主体性の重要さに気づいた」ことが、結果的に、「福祉の仕事はやりがいとあるものだと知り、「大変そうだけど自分もソーシャルワーカーになりたい」「自分も社会福祉士や精神保健福祉士の資格を取り、色んな人を支えていける存在になりたい」「やりたいことが見つかった」など、自分の進路・将来について理解が深まっていくことにもつながっていった。

特に授業全体に関わることとなる「先輩」(LA)との交流では、「今後の進路をどうするかなど、本当に自分に必要な知識が増えた」「参考になる話をたくさん聞けた」「コース選択や就職などの参考になった」など、自分たちと同年代の先輩の存在とその関わりによる効果は大きいものとなっている。

この授業が「将来何になりたいのか」「真摯に向き合う」機会となり、そのことが、学科で「何が学べるのか」「何をすべきなのか」「何を学んでいくべきなのか」など、より「学科の学びの理解」と結びつくようになる。また、「実習への期待や不安を共有することができた」ことで、「3年次にある実習が現実的なもの」となって感じとられ、「実習への心構え」ができていく。そしてこれらのことを通して「みんながどう考えているかわかって、不安なのは自分だけではない」「自分と向き合い、他者と向き合う」なかで「不安や悩みを共有」することで「将来への悩みや不安の解消につながる」ことになり、大きな成果につながっている。

このようにして学生達は、「これからどのように福祉を学び、将来どのようにつなげるのかをイメージすることができて」いったと考えられる。

(3) 「ソーシャルワーク的価値への接近」と「福祉の学びを通じた将来へのイメージ」の関係性

学生がふりかえり用紙に記述した個別カード483枚を質的に分類し、そこから統合することにより、最終的にシンボルモデル図はできあがった。シンボルモデル図には「ソーシャルワーク的価値への接近」と「福祉の学びを通じた将来への

イメージ」の大きな島があるように見える。この2つの島にはどのような関係性があるのかを考察する。そこに行き着くために、まず、この2つの大きな島の内部にあるグループの関係性と流れについて検討する。

①「ソーシャルワーク的価値への接近」における要素の関係性と流れ

学外などにおける多くの体験があり、この体験が土台となっている。体験のなかには多様な要素があり、そこで協力・協働、コミュニケーションの活用、関わりへ展開し、関係性を築いていく。つまり、体験が関係性につながっていく。関係性の内容が具体的に示されていくことで学びが深まり、次の段階の自己認識や気づきへと発展していく。

体験→関係性→気づきという流れにはストーリー性がある。学生が体験の学びをベースとして出発し、その行き着いたところは「自分と他者を知る」「自らの見方や変化への気づき」「多様性の尊重」「相互支援のあり方の気づき」であった。これらの要素は、ソーシャルワーク的価値の基本的前提としての人間尊重、人間の社会性、変化の可能性に通じるものであろう (Butrym, 1986)。

②「福祉の学びを通した将来へのイメージ」における要素の関係性と流れ

学内における福祉や手法の学びがやや多いが、留意すべきことは主体的で積極的な姿勢をもった学びが表されていることである。授業プログラムにあるワークを実践することにより、またその際に受けた助言・指導・促しにより、学生は学びの手法を身につけていく。ただし、この手法とは単に技術的な方法ややり方ではなく、ここには実践的で实际的に理解をしていること、その学びのプロセスにおいて他者との関係性があり、その関係性からの学びがあること、さらには真摯な姿勢、心構え、気持ちの共有化という自己の認識も含まれている。つまり、実践の学問である福祉の学びとは、どのようにして体得していくものであるかが明らかになっている。2つのグループである「学びが深まった」と「積極性、主体性の重要性の気づき」とは併走して次の段階へ展開していくのであろう。こうした過程を踏まえて、自らの将来像を思い描いていく段階に行き着く。ここにも

関係性と流れというストーリー性がある。

③「ソーシャルワーク的価値への接近」と「福祉の学びを通した将来へのイメージ」の関係性と流れ

このように関係性と流れを確認し、そこから全体像を見渡すと、2つの大きな島にはソーシャルワークの学びのプロセスが表されていることがわかる。

第一の「ソーシャルワーク的価値への接近」では、体験や関係性というやや主観的・感覚的な要素から、自分と他者を見つめ、自己の変化、成長を感じていく。技術的な側面に加えて、人間的な側面、人間観、自己覚知や倫理観、人間尊重というソーシャルワークの専門性を習得している。

第二の「福祉の学びを通した将来へのイメージ」では、学びの方法を学ぶ、地域や現場を学ぶ、学びの姿勢を学ぶ、将来のことを学ぶというように、現実的で具体的な学び、あるいは客観的で社会的な学びを得ている。これらの学びはソーシャルワーカーが現場で実践をするうえでの必要条件に通じている。

以上から、次のような関係性と流れがあると考えられる。第一における体験や関係性は、第二における福祉の学びの環境、主体性などの学びの姿勢に通じていく。また第二における学びが深まるためには、さらには将来をイメージ化できるためには、第一における体験・関係性・気づきのプロセスを踏むことにより、モチベーションも高まり、意欲的・主体的な意識づけにもなる。つまり、これら2つの島の要素が、互に行き来することで、学びの効果はより高められていくであろう。これら2つのそれぞれの学びの内容とプロセスは、ソーシャルワークの学びにおいても通じあう相補関係があると考えられる。

5. 今後の課題

今回の質的分析の結果と考察から、様々な社会への課題に対応できるための専門的貢献および市民的貢献につながる態度を身につける素地をつくるという初年次実践教育の意図はある程度達成されているのではないかと考えられる。しかしながら、今回の調査は、ある年度の1つの科目について

ての分析であり、今後も同じ科目について調査を継続することにより、さらに研究としての精度を高めていく必要がある。また、初年次教育として、1年次の他の科目との整合性を図り、ムラや無駄のないより効果的な初年次プログラムを構成することが必要とされるだろう。

また社会福祉学科における学びは、講義科目、演習科目、実習科目等、多様な形態で展開されており、さらに、学生個々人が、授業外での課外活動、ボランティア活動、社会活動等を体験することを通じて学びを得るということも考えられる。従って、今後の研究としては、社会福祉学科に在籍している間に何をどのように学んだのかということ、学年毎に経年的に追いかけて調査を行うことを視野に入れて考える必要があるだろう。さらに言えば、トランジション研究という形で、4年間の学びが、卒業後にどのように活かされているのかということまで探ることができれば、そこから遡り大学4年間の学びをどのように展開すべきか、貴重なデータが得られるのではないだろうか。当然、そこには「学生の学び」という主観

的なものを明確化する困難さもあると考えられるが、データの収集、分析方法も含めて精度を上げていきたい。

【引用及び参考文献】

- Butrym, Z. T. 川田誉音訳 (1986). 『ソーシャルワークとは何か』. 川島書店
- 星野欽生 (2005). 「体験から学ぶということ」. 津村俊充・山口真人編, 『人間関係トレーニング (第2版)』. (pp.1-6). ナカニシヤ出版
- 川島恵美・梓川一・岩本裕子 (2016). 「初年次実践教育の方法に関する研究—千刈合宿を通じた学びの検証—」. 『関西学院大学高等教育研究』 第6号, 1-16
- 川廷宗之 (2007). 「社会福祉専門職養成教育における初年次教育の課題」『大妻女子大学人間関係研究』 第8巻, 135-146
- 松下佳代 (2012). 「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析に基づいて—」. 『京都大学高等教育研究』. 第18号, 75-114
- 山浦晴男 (2016). 『質的統合法入門』. 医学書院.

What First Year Students Absorb from the Practical Education : Learning through “the Introductory Social Work Practicum” Course

Emi Kawashima*¹, Hajime Azusagawa*² and Yuko Iwamoto*³

ABSTRACT

The purpose of this paper is to conduct a qualitative analysis of what first year students learned from a full semester course of “the Introductory Social Work Practicum”, offered as the first phase of the practicum training program at the Department of Social Work in the School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University, and to present the learning outcomes. Students of this course filled out a feedback form at the last session. Then their answers to “What did you learn from this course?” were transferred onto descriptive data cards and clustered using the KJ method. The results showed that, from a broad range of experiences as well as wider and deeper perspective through interacting with people, the students became more appreciative of the values of social work, while they acquired practical learning methods, explored further in studying social work, and realized the significance in learning, enabling them to visualize their academic track for the subsequent years in this department, and to grasp the clearer direction for their future in this field.

Key words : first year practical education, learning through experience, learning of how to learn

* 1 Associate Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

* 2 Associate Professor, Nara Saho Junior College

* 3 Part-time Instructor Kwansei Gakuin University